

2009年(平成21年)初冬

河姆渡遺跡

寧波

天台山

紹興

を訪ねて

俳誌「春耕」・中国俳句愛好団

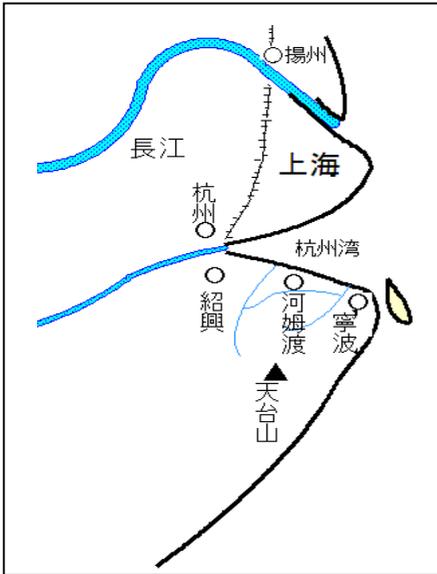
目次	ページ
河姆渡遺跡	3
寧波	
① 三江口（遣唐使船発着場）	6
② 阿育王寺（アショカ王）	7
③ 天童寺（道元修行の寺）	8
④ 天一閣（明代私立図書館）	9
天台山	
① 国清寺（最澄修行の寺）	
朝勤行	10
② 国清寺参詣	12
③ 石梁飛瀑	12
④ 知者塔院	
天台開祖「智顛（ちぎ）」の墓	
紹興	
① 蘭亭跡	15
② 魯迅旧居	19
越劇	20
墨滴余香	
旅の思い出	21

日本に最も近い中国

中国七千年の魅力を湛える江南の旅

梶目良雨

中国通の武田禪次氏と巡る中国の旅の第三回目は江南地方浙江省の寧波、天台山、紹興それに七千年の歴史を秘める河姆渡遺跡などを巡る旅である。常連の棚山波朗、柚口 満、島谷高水の三氏が所用のため参加出来なかったのが残念であった。



平成二十一年十一月二十一日(土)
成田―杭州 簫山国際空港

今年の十二月七日に日本航空の成田―杭州路線が廃止になる予定の思い出のフライトを惜しむかのように、杭州は霧込めの泣き出しそうな天気であった。

上海から、車なら二時間で入ることが出来る江南の浙江省は水路を巡らせた農村風景の土地柄である。

数年前に、上海から桐郷市や烏鎮という町、それに杭州市、紹興市を経巡ったことがあったが、田園の中の派手な万元戸(農家が金持になり建てた金びかな三・四階建の建物。今は万元戸という表現は無いらしいが)がいやに目につく決して美しくない光景に辟易した記憶がある。そんな浙江省ではあるが、今回の旅はその浙江省の別な一面を見せてくれるものとなった。

錢塘江の流れ注ぐ杭州湾の南縁を杭州から東にたどってゆくと紹興・余姚・寧波が位置する。このつながりを三角の一边とするなら逆三角形の頂点に位置するところに天台山がある。

その天台山こそ天台宗発祥の地で国清寺を総本山とするが、日本ではあまりなじみがないようだ。武田禪次氏の綿密な計画により、じつくりと且つのんびりとこれらの町々を歩いてみた。

私の初期の目的は寧波を見たい、ついでに河姆渡遺跡も覗きたいというものであったが、果たしてそれ以上の収穫があった旅であった。

寧波はかつて明州といわれ遣唐使、遣唐使を乗せた船の受け入れ港のひとつであった。他に登州(山東半島)、揚州(蘇州)、があった。(左記ウイキペディア図参照)

遣唐使船は四隻を一船団として出発するが、十数回(いろいろ数え方があるそう)の遣唐使船のうち四隻とも無事に帰還できたのは僅かに数回であったようだ。

こんなに苦勞して得た遣唐使船の成果は誰もが認めざるを得ない。日本は中国を父とも母ともして育ててきたのである。

今回の寧波行きに際し、寧波出身の神田神保町で「新世界菜館」と貿易会社を営む、傅健興さんにもいろいろ



アドバイスを頂いた。蕪村の句に出てくる揚州の津も見えそめて雲の峰

は、こうした、遣唐使船が揚州に辿り着いた安堵感を表わしたものであろう。

明州(寧波)に着いた遣唐使一行は乗組員などは寧波に置いて、船で杭州まで行き、ここでまた船を乗り換えて「大運河」を北上し揚州、徐州を過ぎて黄河に着き、さらに黄河を遡って都の長安まで行つた。次の図がその運河の様子である。



さて、杭州市郊外の簫山国際空港に降りた私達は杭州湾の南縁に沿って東へ寧波を目指す。バスで二時間ちよつと進むと余姚江の岸に河姆渡遺跡に着く。

◇ 河姆渡遺跡

(黄河文明を更に二〇〇〇年遡る長江文明)



太陽を二羽の鳥が守る図柄の蝶形器



復元された河姆渡人

余姚市(よちよう 中国語表現イー・ヤオYu・YaO)は余姚江の流域にひらけた町で余姚江は寧波市内まで東流して湾に注いでいる。寧波市内で奉化江と交わる場所が三江口でかつての川湊になる。

余姚と寧波の中間に位置する丘に抱かれた穏やかなところに河姆渡遺跡がある。一九七三年に農地の開拓作業中に発掘された遺跡だが掘り進むにつれて七千年前に遡ることが出来た大発見となった。

これまで中国は黄河を中心に文明が発展して来たと思われられてきたが、長江(揚子江)を中心にして更に二千年遡る、古さと精巧さを持つ河姆渡文明が付け加わったことになる。黄河は黍粟を栽培する文明であるのに対し、河姆渡文明は稲作中心の文化である。稲作の日本への伝播ルートなども想像すると、ここは日本人のルーツとも考えられる可能性を潜む。余姚江が蛇行して狭くなつたところから渡し船に乗って遺跡に入る。船頭は厚着をして手漕ぎの渡し船を操ってくれる。船のボゾがきりきり音を立てる。自転車やオートバイも乗れる仕組みになっている。



対岸に河姆渡遺跡がある



渡し船が着くと放ち飼の鶏が岸辺の布袋草について遊んでいる。これらは客が来ると何れ、川岸の田舎料理屋の材料となってしまう運命である。

底冷や河姆渡へ渡る鉄の舟

武田禪次

河姆渡遺跡の象徴になっている女性の櫛を思わせる太陽を二羽の鳥が守る図柄の蝶形器の大きな石のモニュメントを抜けると河姆渡遺跡に入る。

底冷えの河姆渡遺跡博物館に入り先ず展示品を見た。

高さ五米もある地層の断面模型には各年代毎に出土品が埋めこまれてある。見学者はまるで発掘人になった気分である。

細かな展示ケースを見てゆくと、その精巧さは勿論であるが、生活用品の数々に、ここに生きた河姆渡人のやさしさが伝わってくるようである。鳥の骨片を利用して髪留や縫針など、(おもちゃと思われる土器の動物など)人生を楽しむための小物まで残されている。

屈葬の展示見下ろす懐手

紀元前の犬の糞見る寒さかな

畔柳海村

武井まゆみ

河姆渡なる遺跡の隅の冬菜畑

大溝妙子



農具の鋤、鍬、織機の杼や漆塗りの木筒、細かなものは精巧に作られ、籾穀も多量に出土している。稲作中心文化であるせいだろうか我々日本人には親しみのある風景であると思った。

特に私が感心したものに、堅立住居の柱を組み合わせるときに利用された柱に空けられた臍が挙げられる。この時代の堅穴住居に用いられる柱の組立ては、縄でしばるくらいと思っていた私には先人の技術の確かさに恐れ入るばかりである。

同行の池内けい吾さんと、七千年前から我々の生活は大して変わっていないではないかと話し合ったものである。

この河姆渡遺跡に示された文明は相つぐ洪水により

打捨てられてより高地を目指して移ったと言われる。

黄河文明が、仰韶から殷墟まで黄河をだんだん下って殷（又は商）五朝が成立する過程はよく知られているが、それに較べ河姆渡文明はBC二〇〇〇年頃に突然途絶えて後につながらなかったようだ。大洪水により消滅したとも言われる。が地球温暖化により海面が上昇する海進の時期に一致するのでこれと何か関係があるのかもれない。

孔子はBC五〇〇年頃の人。「禹なかりせば我それ魚か」と夏王朝（未確認）の禹王を称えた言葉を残したがその意味は「洪水続きの中国においては魚のように生活しなければならなかったが禹がいて治水をしてくれたのでそうはならなかった」という意味である。

孔子の称えた禹王朝は忽然と歴史上から消えてしまったが、その禹王陵は紹興市会稽山の下にある。その禹と河姆渡文化とのつながりを知りたいものである。

河姆渡文化を作った人の末裔が禹の一族であり、この人たちは越人（又は夏人）と呼ばれ、やがて徐福伝説に代表されるように、三千人の若き男女や百工（技術者）を引き連れて、更に五穀の種をもって日本に渡つて来たと思像するだけで楽しくなる。

徐福伝説はBC二〇〇年頃のことである。日本の歴史が繙かれるのはさらに後の「漢委奴国王」印が与えら

れたとされるAD五七年であるから中国の歴史の古さは並大抵ではない。

◇ 寧波に入る

夕刻六時にポートマンホテル「東港波特曼大酒店」に到着。荷物を部屋に置いて直ぐ、「向陽漁港」太古店に向う。

私たちは前出、寧波出身の新世界菜館社長の傳（フー）さんの紹介でこれぞ寧波料理と言うべき地元で人気の海鮮料理（「向陽漁港」太古店にて）を楽しんだ。

伊勢海老・鯛・鮑・くらげなど高級な食材もあるが、殆どは野菜を旨く調理したもの。家郷料理（家庭料理）は薄味で日本人の口によく合う。ガイドの溪さんと運転手も含め総勢十三名の食事で二、三〇〇元。安くて美味しいと何時も思う。

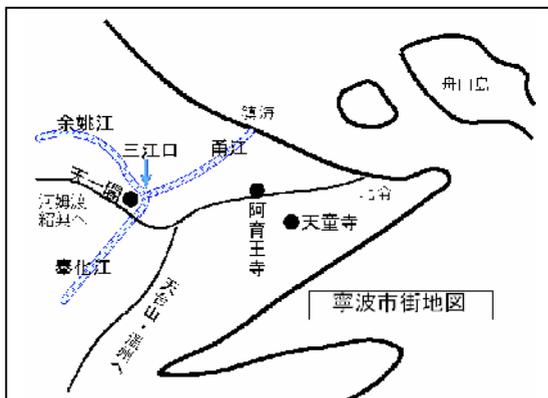
寧波は山を背にした港町。北侖（べいりん）地区の開発が終わると世界一の船貨量となる良港の条件を持っている。寧波の港を出て西風に押されると自然に九州に着くとされ、逆に日本からは東風に乗れば寧波に着くという。遣隋使・遣唐使が目的地としたここ寧波が古くから日本と深いつながりがあることをまさに実感した次第。

平成二十一年十一月二十二日(日)朝雨。昼から曇。

◇三江口(揚州の港のあったところ)

三江口(さんじゃんこう San・Jian・Kou)は寧波の中心繁華街に位置して、余姚江・奉化江・甬江の三つの川が集まるところで三つ又という意味。日本で言えば落合と呼ぶのだろうが、実際は二本の河が落ち合うところなのだが、一本の川がこの上流と下流で名前を変えるために三つの川が合するところと呼ばれる。

三江口の川岸には道元禅師入宋記念碑が建てられている。河口から十数km上流に位置するが、海水による船の痛みを避けるためもあり、川水が流れ、かつ、便利



な場所に港町が作られたそうだ。

しぐるるや道元禅師上陸地

池内けい吾

遣隋使、遣唐使などの正使一行は入国許可を受けた後、この港から中国船に乗りかえて長安などの内地へ向った。

付き人や船の関係者は寧波に留って長期を過ごしたので寧波の風俗をよく学び、特に料理などは自ら行うものであったために、この寧波料理を習得しそのために寧波料理が日本料理のルーツとも言われている。(新世界菜館・傅建興氏説)



三江口にある道元禅師入宋記念碑



三江口の橋から下流を見る

明州の波止の足跡時雨けり
柳散る海路の果ての三江口
入宋の船影はるか冬の霧

暮目良雨
飯田眞理子
大溝妙子

◇阿育王寺（アシヨカ王寺）

今日は現地ガイドの董さんが担当。先ず、寧波は最近まで、日本から蘭草の生産を請け負い相当量を生産していたことなどを教えてくれる。

寧波がよく知られているのは、鑑真和上が日本を目指して乗船した港としての寧波ではないだろうか。

特に第二回目渡航船は寧波沖で座礁し、上陸して北侖に近い阿育王寺（あいくおうじ。別名 アシヨカ王寺。創建二八二年）に仮寓し阿育王塔（釈迦の特に頭部仏舎利を祀った塔）を拜んだと言われている。因みにアシヨカ王は仏教史上最大の第三次結集を行い、経・律・論の整理をしたのち、僧を各地に派遣し仏教伝播を行い、八万四千に分けた仏舎利のうち印度から運ばれた釈迦の骨が十九ヶ所の中国各地の寺に収められた。しかし現在残っているのは三ヶ所で寧波・阿育王寺（頭骨）、北京・靈光寺（歯）、西安・法門寺（指）とのこと。

石鼓大き阿育王寺や冬椿

池内けい吾

舍利塔に悴みし手を合わせけり

墓目良雨

船待ちの和上の寺や冬椿

武田禪次

冬の雨打つ舍利殿の瑠璃瓦

飯田貢一

尼僧らの眼の澄みてをり冬の霧

武田孝子



阿育王寺 放生池前で



阿育王寺の塔



石鼓

阿育王寺からほど近いところに天童寺がある。

◇ 天童寺は中国禅宗五山の一つで七三二年、唐の法施によつて開基された。日本臨濟宗開祖栄西もここ

で修行。茶を日本に持ち帰って喫茶を広めたことはよく知られている。寧波のあたりは海の気象の関係で霧が多く発生し、雲霧茶と呼ばれる霧の育んだお茶の産地。

一二二三年には道元禪師がここで学び、帰国後に日本曹洞宗を創立した。道元は商用船で日本から寧波に着き、その船に乾燥椎茸を買い求めに来ていた阿育王寺の老僧に、「なぜあなたのような高僧が買い出しに来るのですか、食事の仕度など他の人に任せたら」と質問し、逆に、「食事の準備こそ最高の修行ですよ」と諭された。道元はこのことを天童寺で如浄に教えを乞って身をもつて理解することになった。道元の「空手還郷(げんきよう)」は、お経や仏像はいらない、真の仏教は自分の心の中にあるから手ぶらで日本に帰って来たことを説明するときに用いられる言葉。ここから只管打坐の座禅に繋がったでしょう。

松並木(万松路)の参道をゆつくり登ると山を背にして静かなたたずまいの天童寺に入る。

冬霧の山深くあり天童寺

冬帝の座す禅院の大樹かな

飯田眞理子

武井まゆみ



千僧鍋



天童寺回廊

山霧に烟る境内の寂かさは言うまでもありませんが、観光客に解放しているとはいえず、実に静の一語に尽きる。フェルトの冬靴を履き首から大きな前掛を下げている典座とすれ違うとき出家者の厳しさを感じる一瞬。食堂附近の厨房には千僧鍋と呼ぶ大鍋が三基竈の上にしつらえてあります。見学コースに置かれているので普段使われていないのですが、大きな会式の時にここで煮炊きされると考えるとそのにぎやかさが感じらる。中国の僧は妻帯肉食が完全に禁止されていると聞きました。



道元禪師の御影



山の斜面に建つ天童寺

昼食を市内のレストランで取ったが、こども海鮮料理屋で見本の魚貝を指示して調理させるもの。量が多すぎて後悔したが、ムツゴロウや魚の浮き袋などを始めて食べていい思い出になった。

寄鍋に目を剥いてゐるむつ五郎

坪井研治

◇ 天一閣

天一閣は明代の一五六一年から一五六六年にかけて造られた中国最古の蔵書処で中国古代史を研究するにあたり重要な文献が収められていた。蔵書の数は三十万冊以上で、明代の「範欽」という役人が一人で収集し書庫を建てて保存したものとのこと。現在、蔵書自体はないが建築・庭園もすばらしく、故宮にある文淵閣など宮廷内の蔵書楼はこれを模して作られたそうだ。



麻雀発祥の地とか



鰻絵ならぬ手絵



書庫内部



閲覧用机と椅子は黒檀製



範欽さん像

書を蒐め且つ守る一世冷まじき
黒檀の椅子は冷たき艶持てり

墓目良雨
飯田眞理子

◇ 天台山へ

寧波見学を終えてバスで、天台山へ向う。行程約百五十km。霧の高速道路を走り続けること二時間。「天台賓館」に着き夕食。夕食後すぐ句会。田園料理(家郷料理)とでもいうのだろうか、さつま芋や唐黍が美味しい。六百元。

山中の趣のあるホテルで離れの建て方はいいのだが、屋外通路の寒さはこたえる。真冬はどうなるのだろう。エレベーター無し。疲れた体で階段を荷物を引き上げるのはしんどかった。ただ、美しい星空に三日月がかかっていたのをしばしば見上げる。

最澄の修行の山へ冬銀河

池内けい吾

星冨えて天台止観組み上がる

暮目良雨

寒き夜を来て一服の烏龍茶

畔柳海村

平成二十一年十一月二十三日(月)朝霧。

◇ 国清寺の早朝の勤行

国清寺の早朝の勤行を見学できるといので四時起床、四時半集合で、完全防寒スタイルで出発。前夜ガイドが寺に予約を入れてくれた。(お布施三百元)懐中電灯を頼りに国清寺裏門へ行く。闇の中に灯る一個の門灯。窓を叩けど応答無し。ようやく開門してもらい境内に入る。

講堂の横の扉から中に入るとすでに読経の声が堂内にあふれている。百人ほどの僧の他に信者が三十名。女性信者が多いようだ。太鼓・鉦・銅鑼の楽器を鳴らしての誦経が延々と続く。吐く息は白く、時々手をこすり合せている。みなフェルトのような冬靴を履き、マフラーをするもの、耳あてをするもの、毛糸の帽子をかぶるもの色々。中には指ぬき手袋もある。いい加減なようにも思えるが、中国の僧は今でも妻帯肉食を禁止されているので、こちらのほうがもっとも厳しいはず。オットマンのよ

うな台に膝をついたり、手の肘までのせたりして三拝九拝する。

仏像に背を向けて入口にある香炉に向いて一心に読経を続ける。読経のリズムに合わせて白息が伸びたりちじんだりしています。

勤行の最中に堂の隅から一人の僧が引きずり出された。怠慢を咎め立てられたとか、信者の人達がめいめいの僧に配るお布施のことでトラブルがあったとか、さまざまに、後で話し合ったが、信者が参加した勤行や、私たち他人が見学している勤行において、修業が厳しいということを第三者に見せつけに行う一種のヤラセではないかという意見もあった。引きずられた僧は顔が見えないように引きずられ、堂外に出ても仲間の僧十数人が取りかこんで外周からみられないように壁を作ったこともその理由。

經典を借りて誦経のまねを試みましたが、少しも追いかけられません。

マフラーを分厚く巻いて女施主

飯田眞理子

白息の長さ短さ経進む

暮目良雨

勤行や悴みし手をほぐしつつ

武田禪次

声明の渦巻く寒の御堂かな

畔柳海村

◇天台山国清寺とは

天台山は寧波から南下すること百数十km。天台宗の最澄が学んだ寺が天台山のもっと国清寺にあります。国清寺は五七五年、釈迦の教えを理論化した智顛（ちぎ）が三八才の時に開宇。最澄が教えを乞うたのは智顛の弟子湛然のさらに弟子道邃・行滿について学んだのが八〇四年で翌年には日本へ戻って比叡山延暦寺を開きました。

八〇四年、日本から出た第十六次遣唐使船には最澄も空海も参加しました。最澄は寧波から近い天台山で修行し、空海は遠く長安まで行き修行を行いました。密教の經典類を多く日本に持ち帰った空海と最澄のその後の道は変わったものになりました。これも運なのでしょう。

天台山の麓には小さな赤い岩肌をした赤城山が寄りそっています。また、天台山そのものは風光明媚な山で、この山に遊んだ詩人は李白、王維、杜甫がおり、寒山拾得で知られる寒山もこの山に庵を構えたひとりです。



落葉を掃くのは拾得か？



国清寺勤行



国清寺に入っすぐ。



国清寺入口横。隋代古刹と書かれていますが隋の字が変形している。

六時まで続いた勤行が終ると僧たちは食堂に戻ります。一汁一菜の朝食の始まりです。厨の廊下には籾が樽に入れられ、辺に脱穀機があります。この周辺の土地の国清寺のもので農村は昔ながら年貢のように籾を寺に納めるといふことです。籾袋には農民の名が記されています。

芭蕉『奥の細道』羽黒山の章で

……月山・湯殿を合はせて三山とす。当寺、武江東叡に属して、天台止観の月明らかに、円頓融通の法の灯かけそひて、僧坊棟を並べ、修験行法を励まし、靈山靈地の験効、人貴びかつ恐る。……と書いています。

この「天台止観」こそ開祖智顛が到達した境地。釈迦の悟りを開いた状態を止観と名付けたことから天台宗は始まりました。

私達はまことに貴重な体験をすることが出来たわけ
です。

ホテルに戻って朝食を取った後で再び国清寺を見学。
山の斜面に作られた堂宇はさすがに歴史を感じさせますがそれほど広い感じはしませんでした。



日本天台宗が天台
開祖智顛(ちぎ)
を称える碑。



寺の境の川

寒山はみず拾得は落葉掃く

拾得の自得うべなふ冬うらら

暮目良雨

飯田貢一

拾得の裔とも落葉掃く僧侶

武井まゆみ

石梁飛瀑へ

◇天台山行き専用のマイクロバスに乗り換えて頂近くにある石梁飛瀑へ向います。霧込めの国清寺を後にずんずん登ってゆくと突然視界が開け、山晴れの明るい景色が現われます。

バスはさらに登るのですが、険しい山肌の隙間を利用して稲田や野菜畑の段々畑がつきつぎに現われ、耕して天に至るの光景になっています。

◇石梁飛瀑は羅漢たちの悠然と遊ぶところという。岩山を削って流れ落ちる滝で、どこにもあるような滝ですが、滝の落ち口の上に石の梁がかかっている。巾三〇^{センチ}で奥行き一・五^{メートル}、厚さ二米もあるうか、両岸から架かるこの石梁の下を滝水は潜り抜けて落下するのである。この狭い石橋を修業を積んだものだけが安全に渡れると言ひ伝えられて来ました。この滝を基点に上方広寺、中坊広寺、下方広寺があります。

みやげ物屋では閑をもてあまし、家族でトランプゲームに興じてるところです。店先に生きた山椒魚を売って



ほぼ1000メートルにある

天台山村



「智者塔院」、栄西採茶の地を訪れて。



石梁の下を流れ落ちる滝。石梁飛瀑という。

いるので、どうするのかと聞くと滝に放生するのだという。
滝を見に下り上りをしているうちに太腿に昨日からの疲れが出て、足が上がりなくなってしまう。用心・用心。

道があり徒歩で二km下る道筋に国清寺開祖の智顛上人の悟を得たと言われる庵跡があり「智者塔院」と呼ばれるところがある。
また、栄西が茶の種を採取した茶畑などがあり訪れる人も疎らな自然のままの尾根道を小春日和のなかを楽しんだ。

茶が咲いて栄西求法の径いまでも
眠る山知者塔院を蔵しけり
茶畑に強霜の綺羅波打てり

池内けい吾
臺目良雨
武田禪次



「智者塔院」または「智者肉身塔」

◇「智者塔院」

バスで山を降りる途中から間

雪晴れに驟馬の鞍干す山の寺

武田孝子

あらはなる説法岩や大枯野

飯田眞理子

天台山や冬菊の色即是空

飯田貢一

尾根道にみつけてうれし三十三才

坪井研治

芋の茎干す綿入れの女達

畔柳海村

私は残念乍らこの山道を下りる自信がなく、下りて行く一行を見送ってバスに乗り山の中腹の出口で待機した。

麓の国清寺の昨夜からの寒さに較べこの山上の暖かさはどうしたことだろう。小春の日射しを浴びながら谷を距てた向う側の千枚田を眺め、鳥の鳴声に耳を預けて天台山中の豊かな時間を浪費する。ふと思いついて日本から持って来た携帯電話で東京の妻に電話をかける。こんな山奥でもきちんと通話できる中国の国作りに感心する一瞬でもある。

再び全員を乗せたバスは山を下り国清寺附近の「臥龍山荘」で昼食をとる。ここも目の前で食材を選び調理させる方式だが海から少し離れているので海鮮料理とは言えないようだ。水槽の大鰻に目が止ったが、注文は女性達に任せたので口には出せなかった。ちよつと食べてみたかったものである。

バスは最後の遊覧地紹興に向かう。早朝から起きてい

ることもあり昼寝を楽しんでいるうちに紹興市内に入っていた。



蘭亭入口

紹興(越州)へ

◇会稽山はどこだろうなどときよろきよろしているうちに、いつの間にかバスは蘭亭に着いていた。

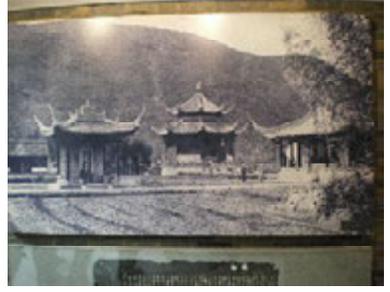
平成十五年に訪れた蘭亭の周辺はすっかり変り、畑中に竹林があり分け入ると入口があった過去と較べ、大きな駐車場、清代の建物を模した商店街など戸惑ったほどである。

王羲之の千の書体や冬珊瑚
右軍の書千秋不易竹の春
蘭亭のここに極まる枯蓮

池内けい吾
墓目良雨
大溝妙子



A 図の左。蘭亭の碑。



A 図 かつての蘭亭の風景。まわり畑と竹藪。



A 図の右。鶯池の碑。



A 図の中央。康熙帝などの碑。

永和九年歳在癸丑暮春之初会于会稽山陰之蘭亭
に始まる王羲之の「蘭亭序」は今でも私たちの心を捉え
て放しませんが、それは風雅の極みのような流觴曲水の
宴の内に秘められた王羲之の憂国の情に後世の人々を
も感動させるものがあるからなのだろう。一七〇〇年近
く昔のことであるが。

蘭亭序には、東晋の時代「永和九年、歳は癸丑に在り。
暮春の初め、会稽山陰の蘭亭に会す。」の書きだしにつづ
けて、会稽山陰の風景、穏やかな春、そして、春風に誘わ

「蘭亭跡」



曲水の流れ。



絵巻物に出てくる王羲之

れるようにはじまる宴の様子が書かれていきます。次に、人の生死という命題が書かれていきます。

「人は、宴につどい、満ち足りた時を過ぎている間は、歳をとって死に近づいていくことなど考えもしない。昔の人は言った、生きることも死ぬことも、ともに大問題である。」そして、最後に、「時が流れ世の中が変わっても、この日に宴を開いた自分たちの心を読みとってほしい。」と蘭亭序を結んでいます。

この序文の最後の部分で強調する自分たちの心とは、漢民族滅亡の危機の中、あえて流觴曲水の宴という民族伝統の行事を開くことで漢民族の誇りを、人々の心に呼び覚まそうとしたことです。

日本では流觴曲水の宴というと宮中の雅な遊びという長閑さばかりが印象にありますが、この蘭亭の宴は、鎧甲冑こそ着ていませんが政治・軍事を司る人間が憂国の心を抱いて漢民族の文化を再認識して国を再興するものふ振りに価値があるようです。

それには、次のような時代背景があつたからです。

三国志の時代が終わり久しぶりに中国全土を統一したのは、魏・呉・蜀の三国のどの国でもありませんでした。蜀の諸葛孔明と晩年雌雄を決して戦った魏の名将司馬仲達の孫、司馬炎が造つた晋の国でした。しかし、司馬炎が興した晋の国もわずか三十年で滅亡することになりました。

す。

北方の遊牧騎馬民族(匈奴)が勢力を増し、ついに漢民族は、異民族に有史以来はじめて中原、すなわち黄河流域をあげわたすことになりました。そして晋は、黄河を渡りついに長江をも渡り、かつての呉の都、江南、現在の南京に落ちのび、この地で漢民族の文化を継承しました。

この時、南に落ちのびることを皇帝に進言したのが王羲之の父王曠でした。王曠は、王羲之の幼い頃に匈奴軍との戦いに負け、

捕虜になり辱しめを受けたので、幼い頃から王羲之に、異民族に対する憤りと憎しみを教えたのです。

王羲之は、やがて秘書郎となり、寧遠將軍・江州刺史をへて、三三一年に右軍將軍・会稽内史となりましたが、四年で官を辞しました。この官名から右軍とも呼ばれます。

王羲之が右軍將軍の頃、北伐の機会を狙える立場にもなりました。しかし、北伐の機会は訪れず、匈奴を撃ち中原を奪回することに参加することはできませんでした。人々の心の中に、あきらめの気持ちが漂いはじめていたときに王羲之は、蘭亭序の中で人の生死という命題を問い、生きぬくことであきらめに似た

気持ちを一掃し、伝統行事を通し、漢民族の誇りを取

り戻そうとしたのです。王羲之の生きぬくという精神が、連綿と続いてき

た漢民族の伝統文化を消滅の危機から救ったと言えます。

王羲之の願いは、すぐにはかきませんでしたが、その後、約三百年間中国では、戦乱の世が続きます。漢民族が中原を完全に奪回するまでには、唐の太宗李世民の登場を待つことになりました。

しかしながら、王羲之の精神は、蘭亭序を筆頭に約二千年余りの書の中に込められ、約三百年後に蘇ります。永和九年(353)四十七歳の王羲之が、会稽山の蘭亭に名士や一族を招いて禊を行い曲水の宴を催し参加者の作品をまとめた文集の序として書かれたものがこの「蘭亭序」です。

王羲之の筆は優美で筆力有る作風だったようですが、健康のほうは五十九年の生涯を通して壮健とは言いきれなかつたようで名門の生まれでありながら地方官を好み、四十九歳で会稽の長官を最後に官を辞した後もその地にとどまり自ら逸民と称して書の工夫などして自適の生活を送りました。

退職後は代筆を使っていたとの説もあり、多作ではなかつたようです。行書・草書の短い手紙が現在も貴重な手本とされています。名人ともなれば手紙一本でも短

い文にして、字配り字形とも良いものをと努力してしたためたでしょう。「王羲之とその仲間」は四十一人蘭亭に会しましたが、この日詩を作る者が出来た者は十七名。残りは罰として酒を三杯立て続けに飲まされたということです。これが「駆けつけ三杯」に変わったという話はいかがでしょうか。

前回の旅で鼠鬚筆(そびんひつ)を買いました。

◇ 紹興酒製造工場見学のために神田神保町の傳さんにお願ひしていた傳さん経営の「大越酒業」は、時間の関係で見ることができなくなりましたが、ホテルの秦望大酒店へ行く道すがらにある咸亨酒店工場を少しだけ見学できた。甕に詰めた酒を蓮の葉と竹皮で封をしたあと初殻の混った土で固め消毒・虫除けの石灰を塗り保存する。五年・八年・十年・十六年・二十五年・三十年と保存すればするほどおいしくなり、かつ水分が減り甕の中の酒は減つてゆくという。瓶に移したものは蓮の葉や竹皮の効果がなくなる訳だから早く飲むにこしたことはない。手造りの紹興酒はこれから一月末で仕込みにかかる。いわゆる寒造りなのであるという。

今年酒封ず蓮葉と竹の皮

武田孝子

敗荷で甕の蓋して紹興酒

坪井研治

紹興酒甕に眠らせ年行かす

大溝妙子

平成二十一年十一月二十四日(火)朝晴れ。



紹興酒工場の甕



◇ 紹興は水郷の町。別名萬橋の都。市内に水路が巡らされている。水路には、この名物の一つ黒船(烏篷船)が浮かんでいる。黒い苦(又は篷)の丸屋根を持つので烏篷船と呼ばれる。市中の運河を行き来するところはかつての日本の猪牙舟と同じ役割。

全部で一万六百の橋が市内にあるそうで、到るところにクリークが掘り巡らされていて市民は水と共に生活をしている。

本日の夕食は紹興随一の「紹興飯店」の会席。紹興名物の黒野菜や豚の腸詰めなどどこでもおいしいものづくめ、食後の句会が終ったのは九時半を過ぎていた。

枸杞の実と竜の落し子スープかな

武田孝子

夜咄や六腑に流す五糧液

武井まゆみ

「八字橋」など、南宋の一二〇〇年頃の架橋もあります。今回は訪ねなかったが、平成十五年に訪ねたとき、人々はこの歴史遺産の橋の欄干に布団を干し、毛布を干し、路面には白菜を干して冬に備えていました。干からびた野菜を箆にのせて干してあったり、芥子菜類を干しては塩漬けにして黒野菜という保存食を作るのです。

今日の宿は「秦望大酒店」

魯迅記念館・及び故居はまさにこうした水路に面していて直ぐ傍に、黒船の船頭が客待をしている中を記念館へ向う。橋のたもとで臭豆腐を揚げている屋台があり早速買って食べる。



臭豆腐を揚げている屋台



クリークには烏篷船

「魯迅旧居」は魯迅の全生活がここに来ると理解できるようになっている。

「ヘンは剣よりも強し」。魯迅の評価は現代において益々高まっている。周恩来も紹興の出身。清朝末の女性革命家秋瑾も紹興出身である。古くは陸游も出ているというから豊かな町なのであろう。

この当たりは高層の建物がないので空が広く気持が良い。

魯迅の家は周と言って名族の出である。周恩来も同族。かつては広い土地を所有して小作人も多くかかえていた。家の前にクリークがあり農作物の積み下ろしにまた客船発着に使っていたのであろう。魯迅旧居には大きな舟の櫂などが残されている。

紹興名物に「二つの黒」があるという。

①黒船②黒帽子③黒野菜。
黒舟は紹興特有の客船。クリークを通行する細身の舟。黒いスライド式の天蓋が特徴。黒帽子はフェルトで出来た折り返し鏝の付いた帽子。雨や陽射し除けによい。黒野菜は野菜の保存食。

庭いまでも冬菜を育て魯迅故居

池内けい吾

黒野菜黒船黒の冬帽子

暮目良雨

鞆の阿Q居さうな水の路地

武田禪次

クリークを束の間染めし冬夕焼

飯田眞理子

冬菜干す石橋くぐる烏篷船

武田孝子

冬日差す窓辺魯迅の筆硯

大溝妙子

観念の鴨の眼と遇ふ朝の市

畔柳海村

天高し越の越たる黒瓦

坪井研治

烏篷船の影を沈めて冬の水

武井まゆみ



魯迅旧居。魯迅の机。



魯迅旧居。魯迅の寝台。



魯迅旧居前広場



魯迅記念館。魯迅と左が藤野先生。

越劇とは

◇この記念館には越劇を見る小舞台が屋外にしつらえてある。もともと越劇は男性が演じそれを見るため例の黒船に乗って農民たちがやつてくるものだったそうだ。別名社劇と言う。秋祭に行われたので社(やしろ)の劇と呼ばれるのだろう。そのうち女性が男役もこなし、日本の宝塚歌劇のようになった。衣装は簡素で楽器も単純。要するに京劇みたいに金びかで音楽もドカン・ガチャンでないのが特徴。たまたまガイドの友人敏英さんが一人芝居を演じていたが、水袖という腕を降り出せば袖が飛びでる仕掛けの舞台衣装の仕組みなどを詳しく

く説明してくれた。歯切れのよい歌と踊りと語りではなく楽しむことが出来た。

越劇の妓女と語りて日短し

暮目良雨

越劇の扇の風も小六月

武田禪次

越劇の鼻音やさしき小春かな

飯田眞理子

綿虫や越劇を見る水路越し

畔柳海村

因みに中国の伝統演劇には越劇(紹興地方の演劇)、川劇(四川省の演劇)、京劇(北京の演劇)、湘劇(湖南省の伝統劇)、黄梅劇がある。

黄梅劇の説明は次の通り。

長江の中下流域は高温多湿でお茶の栽培に良いところ。春、小雨のなかに女の子たちは歌いながらお茶の葉っぱを摘んでいました。それは「茶歌」でした。この「茶歌」は二百年の間に充実、発展されて後の黄梅調、今の黄梅劇になりました。黄梅劇は湖北省で生まれ、安徽省で育て、全国でいちばん人気な地方劇になったと言えます。(この項インターネットより)



越劇は紹興地方の社祭に演じられた地方劇で社劇とも言う。京劇のように派手な鳴物の伴奏が無く穏やか。元は男性が演じていたが、今は女性のみで演じるそうだ。水路を船に乗って鑑賞したという。

女優はガイド謝さんの友人、敏英さん。水袖の説明もしてくれた。声のよく通る人である。

少し強行軍であったが、日本人のルーツに触れたような実りの多い三泊四日の旅であった。

参加者 池内けい吾、臺目良雨、武田禪次、

武田孝子、飯田眞理子、飯田貢一、

武井まゆみ、大溝妙子、畔柳海村

坪井研治、坪井陽子。

墨滴余香

米と蜜柑のふるさとを訪ねて

池内けい吾

従来ほとんど知識のなかった「河姆渡遺跡」を見学出来たのは、今回の旅の僥倖であった。

初日の十一月二十一日に訪れた河姆渡遺跡は、杭州空港を出たバスが、三、四階建ての農家や冬菜畑が延々とつづく村をいくつも過ぎた奥に、ひっそりとしずまっていた。

かつて寧紹平原と呼ばれた浙江省地方で、六千年以上も昔から米の栽培が行われていたことを実証したこの遺跡は、一九七三年、水利工事中に見えられたもの。発掘された農具や復元された住居などを観ながら、古代日本の米作文化が、ここから何らかのルートで伝播されたのでは、と想像した。

ただ、発掘された籾の種類は「粳(せん)」だという。ぱさぱさしていて、炊き上げても粘りのない、いわゆるインディカ米に相当するものだろう。現在の中国では、日本と同様に「粳(うるち)」と「糯(もち)」しか栽培されておらず、六千年前の「粳(せん)」はなぜ河姆渡文化とともに

に消えてしまったのか、不思議に思われた。

運河に浮かぶ渡し舟や放ち飼いされている地鶏など、遺跡周辺のたたずまいにも、なぜかふるさとへ帰つて来たような懐かしさを覚えた。

日本の蜜柑の代表的なものは「温州蜜柑」である。いま栽培されているのは江戸初期に偶発実生したものの子孫だが、その先祖は浙江省黄岩県から禅僧によつてもたらされた。

かつて、温州蜜柑のルーツを訪ねるテレビ番組をプロデュースしたことがある。その際、現地取材はダイレクターとリポーターに任せため、自身で浙江省の地を踏むことはなかった。今回の旅で楽しみにしていたことの一つは、留学を終えた禅僧が温州蜜柑の原種をたずさえて船出したはずの寧波の港を、この眼でみることであった。

十一月二十二日の早暁、ホテルから十五分ほど歩いて案内されたのは、大きな河の合流点にかかる橋の上であった。

河の名は「甬江(ようこう)」。西方からの余姚江と南方からの奉化江が、ここで合流して甬江となる。地元では「三江口(さんじゃんこう)」と呼ばれている。河口から二十キロも上流のこの地点が、かつて南宋や明と日本をつなぐ船が発着した港(甬港)なのだ。

平安期の空海や最澄も、鎌倉期の栄西や道元も、こ

の地に上陸してそれぞれの修行の地を目指したのである。

橋のたもとに「道元禅師上陸地」の碑がある。道元が上陸したのは一二二三年。その頃には日本の航海術も進んでいたらしく、便乗した貿易船は博多から寧波まで七、八日間で到着したらしい。だが天童山へ修行に入る許可が出るまで、船中で三ヶ月も待たされたという。阿育王寺から干椎茸を買いに来た老僧と会うエピソードは、この間のことである。

冬霧のたちこめていた空から、いつしか冷たい雨が降ってきた。小さな雨粒が道元の碑を濡らしながら地に滴り、やがて河へ流れこみはじめた。

冬暖か藤野老師の朱筆かな 武井まゆみ

今となっては河姆渡遺跡も天台山も夢のこのようである。だが魯迅の生家を訪ねたことで、忘れていた何かを思い出したようだ。

もう四半世紀前のことになる。私は魯迅生家の庭で小石をひとつ拾った。今や記憶もおぼろげだが、当時は案内板も地味で魯迅の記念となる物や出版物を展示した記念館は道を隔てた向こう側にあり、観光地と呼

ぶには程遠かった。ただ、小説『孔乙己』に出てくる「咸享酒店」と称する店が近くにあつて、小説にも登場する「ういきょう豆」をつまみながら、お茶を飲んだ記憶がある。学生時代に魯迅の文章に触れ、決して面白味があるわけではないが、なにか深いものがあることをおぼろげながら感じていたことは事実である。

あれから世紀が変わり、魯迅生家は改築されて周囲の雰囲気も様変わりしていた。前には気にも留めなかったが、窓を閉め切つてある二階の部屋のこと今回気になった。そこには魯迅の最初の妻が住んでいたという。どのような気持ちで一生を終えたのかを考えると切ない気持ちになる。

裏庭の百草園では(魯迅の頃にあつたかどうか定かではないが)、自在に伸びている桑の木の幹に触れてみた。ふと没落前のやんちゃに遊びまわっている周樹人(魯迅の本名)の幻をみたような気がした。

そして魯迅記念館では薄暗い硝子ケースを通して目に止まったものがある。魯迅は最初医学の志を立て仙台の医学学校に留学したが、その時に筆記した授業のノートで、細かい字の日本語でびっしり書いてあるところに、同じく細かな字で朱筆が入っている。朱筆はすでに色あせてはいたが、それがどんなに留学生・魯迅の心に温かなものを残したかは、小説『藤野先生』に書かれている。

魯迅はその後文学の道を選ぶことになる。魯迅の文章には「寂寞」という言葉がよく出てくるが、没落後の境遇、清朝末期という時代、革命の同志等の運命等を考えると、やはり重いものがつきまとう。ペンネームが百もあるのは身を隠す為であり、尋常ではない。

「中国と付き合うにはこちらにも懐の深さを求められる」、と二十代の頃に感じていたことが、魯迅の生家を訪ねたことでふと蘇り、目先のことに囚われて過していき今の自分に何かが突き付けられたような気がした。四半世紀前に拾ったあの小石は、今も取手の実家の猫の額ほどの裏庭のどこかに眠っているはずである。

末尾ながら、いつもご心配のみならず始終心配りをして下さっている武田ご夫妻をはじめ、含蓄のあるお話をして下さった先生方、程よい緊張の中で楽しい旅を共にして頂いた皆様方に、心から感謝を申し上げます。

寒行の無言の行なる仕置きかな

大溝妙子

それは、午前四時から始まった勤行がそろそろ終盤に入った頃起きた。一瞬これも寒行の一環なのかと思つた。その直前に裏手で声が上がリ、振り返つた記憶がある。一人の僧がズルズルとゴミ袋の様に引き摺られて、木戸

口から表に出されたのである。すると、読経中の二、三十人の僧が三々五々出て行き、私達の前にもぬけの空状態になった。やがて外で怒号が飛び交うはず・・・と耳を澄ますも、読経に掻き消されてか一向にその気配は無い。そして、気付くとそれまで中心にいた赤い袈裟の大僧正ともいふべき僧が、いなくなっている。多分その僧に一任されたものとみえる。やがて出て行った僧が三々五々と戻り、粛々と勤行は続くのであった。その間、引き摺られた僧、すごい力で引き摺って行った僧、そしてわらわらと出て行った僧の何れもが無言であった。さすが仏教の聖地中の聖地、天台山「国清寺」に修行する僧は違うと妙に感心するのであった。

しかし、我ら俗人はそうはいかない。何がどうして、どうなったのか知りたくてたまらない。同行した現地のガイドに聞いても、彼女も初めての経験との事。早速ガイドはリサーチに乗り出すも、寺の関係者がおいそれと口を開くはずもない。しかし、彼女の情報収集力はたいしたものであった。数時間後には、彼は日頃から態度が問題の僧で、勤行中に寄進者がお布施を一枚一枚配った時、何かズルをしたらしい。などと、さも見て来た如くに報告があった。それに我々も納得し一段落となる。

さて、そんな珍事もあったのだが、この朝勤行の体験はとても素晴らしいものであった。この寺には二百五十人

の僧がいるとの事である。鉦・太鼓・木魚のドンジャン・ドンジャンとリズムミカルな調べに、朗々たる声明が和し、一大絵巻を奏でるのである。門外漢の参加者は我々のグループだけであったが、最後に堂内を唱えながら一周する行の時は、我々も指示に従い手を合わせて、その列に連なったのである。不敬を恐れず言うところの参加型の演劇集団といった趣である。丁度ひと月前、東京で「大般若経六百巻転読法会」に紛れ込み、その華麗な法要に強い印象を受けた事が蘇った。全くの不信心者の私ではあるが、今まで宝塚・ミュージカル・オペラと血道をあげてきて、とうとうここへ来たのか・・・という気持ちである。「仏教面白い！」といったら、あの僧のように引き摺りだされるかもしれないな。それにしても俳句に出会ってほんとに良かった。この吟行を計画し、いろいろお骨折り頂いた武田さん始め、同行の皆様にご改めしてお礼申し上げます次第である。

.....
水の国、寧波紹興

老僧へ一礼をして冬ぬくし

武田孝子

約十年余りも前、主人の北京赴任時代、時間を見つ

けては旅行した。当時は北京では人民服の老人が胡同の街角で日向ぼこをしていたように、文化大革命を匂わす雰囲気が残っていた。中国の文革は寺院や文物をことごとく破壊し、私達の訪れた寺院は、修行僧の影もなく戦場状態で放置されていたものをやっと修復始めた頃であった。ものの哀れを感じる場所が随処にあった。多くの美術品の破壊のみならず、僧侶たちも下方され、寺院が疲弊していた事は、当時中国のどこへ旅行してもそうであった。それでも西域、敦煌の莫高窟(千仏洞)、北京郊外の法海寺の壁画、同じく下町の寺の唐代寢釈迦仏等、限られた遺跡でのみ仏像仏画の美しさに触れる事が出来た。特に唐代の仏像はまるやかで繊細でみずみずしく命の耀きを表現しており、千年、二千年の時空を越えて私達に感動を与えてくれた。

かつての北京の状況から想像していた通り寧波、紹興でも日本に在す鑑真和上像のような生命力のあるものや古の仏像を拝する事は出来なかった。

しかし実際に寺院を取り巻く環境は違った。寺院ははるかに続く晚稲田や常緑大樹の緑の山に抱かれていた。諸鳥は雨や霧についてやさしく鳴き交わっていた。まさに長江文明の発祥地とも言える地である。

霧に包まれた天台山では驚くべきことに、五百羅漢の如き修行僧が朝勤行している様を見学出来た。白い息

と一貫目もあるうかと思われる燭の燈に浮かぶ僧の面立ちは神々しく感じた。寒い未明の闇深い本堂も人の気で満たされていた。

この一句は道元禅師が修行された天童寺の昼食の時の句である。寒く長い長方形の机が石畳の食堂に並び、一様に白い食器が二、三皿づつ並べてあるのみであった。典座の僧が少々湯気の立つ麺類をその中の一碗によそっていた。あきらかにそれは粗食で、一汁一菜の様だった。食堂を覗き見してはつと正面を向くと、一人の老禅師がそこに入られるのと、鉢合わせてしまった。今でも彼の顔を鮮明に思い出す。不快を露にするでもなく、色白の肌、澄み切った目で、穏やかな顔であった。思わず、一礼をした。年齢をあまり感じさせない丸顔で、艶やかなそれだけで透明感のある肌が印象的だった。彼は何事があつてもその表情を変える事なく穏やかに過しているのではないだろうか。まさに仏様の顔で、深く静かな湖水のイメージであった。このような老禅師でさえ若い修行僧に混じって食事をする事にも驚いた。

かつて道元禅師がこの寺で修行していた折、高僧の如浄禅師に直々に受けた教えもそれに付随する作法なども、帰国後その通りを永平寺で実践されたそうである。その如浄禅師もこのような仏のような風貌の方であったか、と勝手に印象をだぶらせた。心の平安を得るために、

長い教への道のりを辿つて来られた風貌であった。仏像はなくとも生きておられる仏のような僧に一瞬でも会えた事で、この旅は充実感に満たされるものになった。霧雨はすべての雑音を消して降り続けていた。放生池には金魚の大群が上空に舞う鳥の群れの様な航跡を見せていた。江南地方は北京や西安の乾燥地帯の繁華な都市とは底に流れるものが違っていた。

仏教の奥深さは計り知れないし禅の教への難解で理解し難い。しかしこの旅で私は生きている仏教を感じ感動した。大自然の息吹に包まれた生命力あふれる仏教の有り様に感動した。過日、敦煌の美術修復を实践した平山郁夫画伯が亡くなられた。心からご冥福をお祈りします。

『勤行』

畔柳海村

まだ日も明けやらぬ午前四時半、天台山は漆黒の闇に包まれている。道路脇の溪流を流れる水の音が寒さを一層感じさせる。小さな石橋を渡る。先頭を行く現地ガイドの懐中電灯が照らす国清寺の裏門はまだ固く閉ざされている。

開門を請ふ底冷えの天台山

通用門を潜り抜け、前の人にはぐれないよう真つ暗闇の境内を足早に進む。何も見えないがとつともなく大きな寺に足を踏み入れたことがわかる。

寒暁の七堂伽藍闇の中

階段を上りお堂を抜け、更に階段を上ろうとするとき、突然耳に飛び込んできた美しい音色。声明だ。一度聞きたいと思っていた本物の音色が、階段の上のお堂の、蠟燭に浮き上がる正面の開放放たれた入り口から漏れてくるのだった。体がぞくつとするのを覚えた。

声明の闇より聞こゆ寒さかな

お堂の正面を横切り左手の入り口から中へ入ると、堂内に溢れんばかりの声明の大合唱に先ず圧倒された。百人を超す僧が独特の和音で、独特のコードを進行させていく何かこの世のものでない音色は我々の脳を刺激しやがて心地よい陶酔の世界へ誘うかのようだ。寒い。

香煙の寒気もろとも堂に入る

老僧たちは、厚着した上に揃いの茶の僧衣をまとい、許されているに違いない帽子や耳あて、手袋でしつかり寒さ対策をしている。そして時折周囲をリードするかのように出す高音には張りがあって、力強い。

耳掛けの老僧読経の声高し

一様に頑丈な体躯の若き僧侶たちはこの寒さを一向に意に介さない様子で、一心に声明を唱えている。鉦、鈴、

太鼓、木魚がとるリズムは時に早く、時に緩やかで緩急をつけながら大海を目指す川の流れのようだ。僧たちが声明に合わせていつせいに吐く息が蠟燭の逆光の中に白い。五時半頃、声明の区切りを迎え、木魚が徐々に早くなってくる。

木魚の速まり息の弥白し

鉦や木魚が止んで静寂が堂内を包むと、黄色の法衣に赤い袈裟をまとった導師が退場し、願を掛けにやって来た一団の名前が読み上げられ、その間僧侶たちは思い思いに小休止。互いにひと言も口をきかず次に備えている様子だ。勤行には厳密な作法があるに違いない。やがて僧たちが皆もとの位置に戻り、読経が始まる。願掛けの代表者が僧一人一人にお布施を渡して行く。それらが全て終わると読経の音が一団と高まり、正面から一列になってお堂の中を壁に沿い経を唱えながら巡り始める。その声が我々の右側からやがて背後へ回り、我々も列の最後尾に付く。掌を合わせつつ前に続くよう指示がある。声明の音響の余韻がまだ残る堂内に百僧が唱える経が渦となつてあたかも龍のように天井に向かって昇っていくかのようなのである。正面入り口から入り込んでしばらくじっとしていた堂内の寒気も読経の列にかき回されて動いたようだ。一段と寒さが増してきた。

声明の渦となりたる寒御堂

勤行が終わつて外へ出るとようやくやく白みかけてきた東の空の下に、国青寺の壮大な七堂伽藍が姿を現しつつあった。勤行を終えた僧たちに食堂の前に吊るされた魚板が今まさに叩かれ、朝の食事を告げようとしている。僧たちは物音一つ立てずにすべるように動いている。

寒暁や魚板打ちある僧の影

体は冷え切っているが心は洗われて清しく、声明の音色が耳に残っている。生まれて始めて経験した勤行は美しい音色とともに強い印象となつて心に残った。罰が当たるとの覚悟で言えば、自分にとって声明はミサ曲を聴く様な莊重なコンサートのようでもあった。もちろんこうした厳しい行を毎朝続けている僧侶と、仏法に改めて敬虔な気持ちを抱いたことは言うまでも無い。天台の山の様々な鳥たちが美しい鳴き声を聞かせ始めた。これもまた天然のコンサートである。

寒禽の七堂伽藍に楽奏つ

おそらく生涯にまたとない貴重な体験をさせてくださった武田禅次さん始め、池内・暮目両先生、そして同行の皆様にあらためて心からの感謝を申し上げます。

道元の春秋迎る霜日和

禅次

今回の吟行の旅をゆっくり振り返ってみると、中国のこれら江南の地が如何に日本との関係において、その歴史が古いものであるかを改めて考えさせられた。

ここは日本の縄文時代後期に伝わってきたであろう稲作文化の故地であり、その文化を持ってきた人々や漁労を生業として海を往来していた海人たちは、恐らくこの江南、即ち「呉越」の地から日本列島へ渡ってきたと言われている。もしその推測が正しいならば、我々現在に生きる日本人の血の中にはこの地の人々と同じDNAが含まれていることになる。

個人的には真にそうであろうと信じており、それ故に五感のみならず六感も含めて、この土地に言いようの無い親しみと懐かしさを感じるのである。

時代が下ると、日本の精神文化を支える太い柱の一本である仏教文化の奔流が、この地を基点として始まる。遣隋使船を初めとして遣唐使船、宋や明との勘合貿易船の往来には必ず彼我の名だたる仏僧が活躍している。それらの中の白眉は何と云っても日本へ「律」をもたらした鑑真和上であろう。日本への渡海の苦難の中で、一

年余り船待ちのために和上が滞在されていた「阿育王寺」にはお礼の意味をこめて、どうしても参拝したいと思っていたことが実現した。奇しくも来年の奈良遷都千三百年を記念して、唐招提寺の甍の吹き替えが十年ぶりに十一月落慶したのも何かの因縁かとも思える。

仏縁ということで言えば、この阿育王寺と曹洞宗開祖の道元禅師ゆかりの天童寺、天台宗開祖、最澄の修行した国清寺の三箇寺を参拝することが出来た。それぞれに特色を持つ尊厳なる寺院であった。その中であつて、曹洞宗の禅の風味とでも言おうか、最も印象深く感じたのは天童寺であつた。

天童寺を参拝する直前に、時雨の三江口で道元禅師の入宋上陸地を訪れたこともあり、甬江から寺までの道のりに思いを致すこともできた。小白川と言う細い水路を上り、宋の時代そのままの丸い黒瓦の家並みが広がる邑を抜けると、「万松路」という松並木の石畳が続く参道に入る。道元は寧波に入ると入国手続きの齟齬で約一ヶ月上陸が許されず、船での生活を余儀なくされた。その折に椎茸を買いに来た阿育王寺の老典座との有名な問答がなされている。道元二十三歳の春秋であつた。

倉橋羊村著『道元の心、俳句の心』（朝日新聞社）は、道元の禅の世界と俳句の世界を語っている清々しいエッセ

セイであるが、その中で著者は道元の著した『有事』の中から次の言葉を何度となく引用している。

「しかあれば、松も時なり、竹も時なり」

そして芭蕉の「松のことは松にならへ、竹のことは竹にならへ」に通じるのではないかとしている。

若々しい道元が禅の心を求めて、天童寺の石畳をそして磴を一步一步踏みしめて歩いた跡を辿ると、自ずから道元の言葉が反芻されてくるのである。

.....

明州(寧波)に親しむ旅

暮目良雨

与謝蕪村の俳句によつて私たちは中国の地名に親しんだ。たとえば揚州の津も見えそめて雲の峰へ易水に葱流るる寒さかななど。そして、揚州はいづこ、易水はいづこ探して楽しんできたのである。

このたび武田禪次氏の計画で寧波を中心に旅をしたのであるが、寧波はかつて明州と呼ばれ日本とは深い付き合いのあつた街であつたことを体感したのである。

話を分り易くするために、時代を一一三〇〇年ほど遡ることをお許し願いたい。寧波の親しさが実感できると思う。

七五二年、ここ明州(寧波)に二十年ぶりに第十次遣唐使船が入港した。三年の月日が経ち、正使・藤原清河と副使・吉備真備、同・大伴古麻呂らは唐王朝への朝貢を済ませて七五四年十一月十七日明州を出帆し帰国の途につく予定であつた。

天の原ふりさけみれば春日なる

三笠の山にいでし月かも 阿倍仲麻呂

この歌は、入唐以来三十五年を唐の官吏として働いた阿倍仲麻呂が、この船の出発を待ちに待ち、ようやく日本に帰れると喜んで明州の港で催された宴で披露した歌として伝えられている。この席には仲麻呂の友人の王維もいたとされる。

一方、朝廷から授戒僧を日本へ招聘するように命じられて前回の第九次遣唐使船に乗つてやつて来た栄叡と普照は、唐にやつて来て早や二十年、ようやく鑑真和尚をここにいざない、仲麻呂と清河の乗る第一船ではなく第二船に、副使・大伴古麻呂の斡旋でこそり乗せることが出来た。鑑真たちはそれまでに五度の出港を企てたが何れも失敗し、鑑真は失明し、栄叡は既に死亡していた。

仲麻呂、鑑真らに乗せた四隻の船のうち正使・藤原

清河と仲麻呂を乗せた船だけが漂流して安南に流され、清河と仲麻呂は唐に骨を埋めることになったが、遣唐使船の航海の厳しさを物語るものである。鑑真の日本での活躍の第一歩がここ明州で始まったのである。

明州の港は寧波市の中心街の三江口にあり今も繁華街になっている。海水で舟が傷むのを防ぐために河口から数キロ遡ったところに造られた港であった。

それから約五十年後、八〇四年の第十八次遣唐使船第一船に乗って、今度は最澄らが明州の港に降り立った。一緒に日本を出発した空海の乗った第二船は航路を逸れて福州に着いてしまったので別々に唐に着いたのであった。空海は福州から長安に入り二年間滞在の後、帰路に明州から日本に帰った。

一方、最澄は明州から二百キ離れた天台山に天台宗開祖の智顛(ちぎん)の墓を真覺寺(知者塔院)に詣で、国清寺では天台の摩訶止観を学び八ヵ月あまりの研究を終えて帰国した。

芭蕉は『奥の細道』の羽黒山の章で「……天台止観の月明らかに円頓融通の法の灯かかげそひて……」と記している。その法の灯はここ国清寺に初めて点されたものである。

国清寺は天台宗の総本山であり、天台山麓にある。

私たちは早暁の勤行を見学することが出来た。零度近い寒さのなか百五十人ほどの僧と信者が参加している。かつては日本から来た最澄も参加していたはず。法灯は智顛が灯して以来文化大革命の十年間を除き一四〇〇年間灯り続けている。

国清寺からさらに山を登ってゆくと、天台山頂近く石梁飛瀑と名付けられた滝がある。かつては、道教の道士や羅漢たちが遊んだと言い伝えのある奇岩を載せた滝。水は清らかに落ち続け、放生用の生きた山椒魚が印象に残った。昨夜の雪が日陰に残っている。

日本臨済宗開祖栄西は一一六八年入宋し山に登り、天台山万年寺で臨済宗の印可を受けた。栄西が喫茶の風習を日本に持ち込んで広めたことは知られているが天台山は霧がよく発生する土地でこのあたりの茶は「雲霧茶」と呼ばれ、味に深みがある。

一二二三年、道元は明州(寧波市内)の天童寺に学び曹洞宗の印可を受け曹洞禅の普及に努めた。

この頃になると朝廷の出す遣唐使船のような仕組みは無くなり、栄西も道元も商船に乗り込み宋に入ったのだ。

道元が寧波に着いたとき老僧が乾し椎茸を買い求めに船にやって来て、それを見た道元が「あなたのような年老いた僧にまで食事のための買出しをさせるのです

か」と質問して「道元さんには修行の意味が分つていませ
んね」と諭されたエピソードがある。

くわしゅげんきまう

道元は天童寺を中心に諸山を廻り「空手還郷」、す
なわち經典も仏像も何も持ち帰らない、只管打坐の座
禅の心がけをのみ持ち帰ったと伝えられている。天童寺
の麓の天童村は、清朝のままと思われる古い葺を連ねる
屋並が残されている。ここもいつか訪れたい魅力を持つて
いる町並みだ。

雨の上がった天童寺は、黄色の壁が霧にけぶりつつ静
かにたたずんでいる。

寧波付近には一九七三年発見された河姆渡遺跡が
ある。黄河文明と同じ七千年の歴史を持つそうだ。

黄河の仰留遺跡などが倭作文化とすれば河姆渡遺
跡は稲作文化で日本人には親しい印象がした。復元さ
れた河姆渡人の顔や、精巧な農具や焼物を見ていると
「七千年前も今も余り変わらないなあ」と言う池内けい
吾さんの言葉について相槌を打った次第である。

十一月の末に寧波(明州)、天台(台州)、紹興(越州)
を一泊ずつした強行軍の旅であったが、寧波が日本と深
くの関りを持って来たことを強く実感できた。また、寧
波自慢の海鮮料理や、紹興酒が美味かったこととは言う

までもない。中国通の武田禪次さんのお膳立てが完璧
な旅であった。

寒山はみず拾得は落葉掃く 良雨

(「春耕」平成二十二年一月号掲載文)

.....
冬天や唐物積みし船出の地 飯田眞理子

七世紀初頭の推古朝以来、日本が天皇中心の律令国
家としての体裁を整えるべく、遣隋使、遣唐使を中国へ
派遣したことは、日本歴史上周知のとおりである。

先進国家の法令、文化、仏教等のありとあらゆる文
物を積極的に吸収し(賢明なことに宦官制度だけは導
入しなかった)、奈良朝・平安時代初期に中国風の文化
が開花することとなった。

寧波は、日本(日本という国号は天武朝から使われた
という説あり)からの遣唐使使節団が最初に上陸した
地であり、現在では川の流れる位置は変化しているかも
しれないが、三江口と言われる河港がその場所のこと
である。

最近、今で言う入国管理事務所のような役所跡が、三江口近くの奉化江沿いから出土したらしいが、志を高く持った日本からの留学生、留学僧も多く上陸したのに違いない。

当時の遣唐使船は中国のジャンク船と同様の大型船と考えられているが、新羅との関係悪化に伴い、朝鮮半島沿いではなく東シナ海横断の航路をとったため、航海術の未熟さもあつて海難事故が多く、まさに命がけの旅であつたらしい。

その中で苦難の船旅を終え、無事入唐した多くの留学生・留学僧が、唐の国においてそれぞれの分野で先進文化を学ぶこととなつた。次の遣唐使船が来るまで異境の地で苦勞しながら勉強に励んだのであろう。(留学生の中には在唐数十年にわたる者や、井真成のように帰郷かなわず長安に客死した者もいた。)

そして、帰国ともなると唐の皇帝から遣唐使へ山のような下賜品と共に、法典、仏典、はるばるシルクロードから伝わつた西域の品々等々、日本に持ち帰ることとなつた。

また、仏教を学んだ僧は、仏典と共にその奥義を日本に伝えることになつた。

古代日本国家成立の礎となつた唐の政治制度、仏教文化、風俗等は、彼らの艱難辛苦なしには語れない。

宋の時代に入つても、平清盛の時代から商船の往来は多くなり、室町時代になると中国からの舶来品は「唐物」と呼ばれ珍重されて、武家茶や室町文化に深い影響を与えることとなつた。

このような歴史を踏まえて三江口に佇み、唐時代からの様々な文物がこの河港から船出したと思うと、深い感慨に浸るのみであつた。

最後に、今回の旅行も武田ご夫妻にいろいろとお心遣いをいただいた。心から深くお礼を申し上げる。

.....

「中国寺院での発見」

飯田 貢一

拾得の言葉尽くせば木の葉落つ 貢一

どこを旅行しても寺を見て回る時には、仏像を見ることに主眼を置いてきた。趣味で仏像彫刻をするものとしては、当たり前のことだろう。

今回の寧波、紹興吟行では、天童寺、阿育王寺、天台山国清寺を見た。それぞれ歴史のある寺だ。

中国の寺院は、例外なく、文化大革命の時に、仏像を壊されたらしい。今回見て回つた寺には古い仏像は一体もなかった。

新しい仏像に興味が無かったため仏像を見ることなく寺院を巡った時、何か未体験の感覚を覚えた。見ることに執着せずに見るといふか、雰囲気を感じるとでも言うべきか、物足りなさの中に別の興味が湧いてくる感じだった。

特に天台山国清寺の朝勤行に参加した時、本尊を背にして手を合わせていて、それが自然に思える感じがした。日本にいる時なら本尊に手を合わせるのが当たり前で、仏像を有り難がつて拜んでいた。

本来、寺院には衆生に仏陀の教えであるお経を読む聞かせる目的があったのではないか。中国から日本に伝来した時に勤行の有り様が変わってしまったような気がする。

寺院を見ながら仏像を離れて、初めて仏陀の声を聞いたような気がした。仏教の有り様に気づいたような気がした。

そのことをお経の中の言葉で言えば、「唯揀択(ケンジヤク)を嫌う」ということだ。

揀択(ケンジヤク)＝こだわりと解釈すれば、今まで仏像とこのこだわりを持つていたために視野が狭くなっていたのだ。

今回見た寺院に寒山拾得の対話の展示があった。こだわりを持つていた時なら展示があるなあ、としか思わな

かっただろう。興味の中心が他にあるのだからしかたないのだ。

寒山拾得のそれぞれの言葉が、今までと違って響いて来た。寒山が問う言葉の内に「自問せよ」という言葉が聞こえてきた。拾得の答えの言葉の内に「求めなければ得られない」という自得の言葉が聞こえてきた。

今回の吟行旅行に参加して、中国仏教の神髄を少し垣間見たような気がした。

.....

月曜日

坪井研治

月曜日午後三時半成田発ロスアンゼルス行き。金曜日午後四時半成田着。土曜日午前九時半成田発杭州行き。火曜日午後六時成田着。

このような日程の中で、寧波、天台、紹興の旅でした。

先ずは企画、運営に尽力頂きました武田夫妻に、感謝感謝です。つけ加えますと、我が夫婦の三十五周年旅行でもありました。重ねて感謝であります。

さて前記いたしました日程でありましたから、カリフォルニアの砂漠から、七千年の人類の歴史にタイムスリップした非常に印象深い旅でもありました。

河姆渡遺跡の手漕ぎ舟の渡しは対岸の放ち鳥共々忘れがたき思い出です。七千年前の土器は、彼の国の偽土器事件を想起しつつもその迫力に圧倒されました。

次は霧の寧波の朝、微妙な時差ボケと腹具合での朝の散歩は楽しく且つ印象深いものでした。遣唐使の上陸したその地での、流れなき川の流れば半アルツの頭脳にも鮮明に焼きついております。

次なるは海鮮中華の昼食でムツゴロウを指名し食した事等が思い出されず。食に対してアグレッシブなメタボ夫と、新規メニューに極めて保守的な夫婦におけるメタボ夫のささやかな三十五年目の抵抗に皆様がお付き合い頂きましてまことにありがとうございます。後日の竜の落とし子と共に今後三ヶ月間の酒の肴といたします。

次なるは寒勤行。読経の旋律は他宗教には類例のないものであり西洋音階では記せませんが、沖縄民謡に近く日本人の耳には心地よく染み入る思いでありました。バチカンのミサを音楽として聞いてしまう不信心なクリスチャンにもその読経が真摯な祈りと聞こえたのは何故か？

次なるは天台山。天高し・冬の晴れ・冬麗等、都会育ちの都会の垢にまみれきった我が身には驚きと喜びの一時でありました。特に尾根道を渡りながら日本にも

無い、ましては禿山だらけのカリフォルニアには無い雄大な景色と、そこに隠れた歴史には圧倒されました。

最後に黒瓦について。

今回の旅で一番印象に残ったのは旧来建築物の過半に葺かれていた黒瓦です。日本の瓦と比較すると薄く小型でその機能性はわかりませんが、屋根の微妙なカーブを現出する大きな要素でありその意匠はさすが中国の悠久の歴史を感じさせるものでした。無機質な金属が現出する現在の建築物のカーブ(アール)と違い、温もりのある姿は一生忘れられないものとなることを確信しております。

「河姆渡、寧波、天台山、紹興」俳句の旅

写真・文責 墓目良雨

企画 武田禪次

会計 大溝妙子

作品整理 武田孝子

制作 同

印刷・製本 青蛙堂

平成二十一年十二月二十五日

